

ミニシリーズ：社友の活動を訪ねて

第2回：日本のエーゲ海「牛窓」での安心・安全野菜の栽培

3頁の記事で既に紹介したように、日本のエーゲ海と呼ばれる岡山県瀬戸内市牛窓で頑張っている社友のひとりを訪ねた。今回の訪問中、昼は瀬戸内海を望む農園で作業を共にして汗を流し、夜は他のメンバーにも集まってもらって収穫したばかりの有機野菜を肴に杯を傾けつつ話を聞くことが出来た。ここの有機農業者にはリターンやIターンを含む新規就農者が多い。野菜や米の栽培技術に関しては、多くのメンバーが牛窓での営農を始める前に何らかの研修を受けており、就農に際してはある程度の経験を積んでおくことの重要性が強調された。経営に関しては個人あるいは家族経営でやっている限り、有機栽培の生産物の販売だけに頼って生計を立てることはなかなか大変で、並行して他の現金収入の道を探るメンバーもいた。有機野菜の栽培には通常の栽培と比べて、雑草除去や害虫防除に比較にならないほどの時間と手間が必要になる。労働力を雇って確保したとしても、それに応じた販路拡大によって採算ベースで有利になるとは限らない。何らかの組織化によってもう少し楽に有機農業に取り組みないかと考えているメンバーもいた。さらに、労働力確保のために、都市住民の農業体験やエコツーリズムあるいは有機農業の研修の場としての利用等を考慮した仕組みについても真剣な議論が行われた。

自然食品の生産、加工、販売を連合体として実践している組織があると聞いて、事務所と農園を訪ねた。組織の形態としては、農産物生産、農産物小売、飲食業、製菓、製パンを含む連合体であり、有機栽培による生産物に付加価値を付けるという意味で、加工業やレストランとの連携が極めて有効であると感じた。農産物生産部門が農業生産法人ワッカファームであり、単に有機野菜を生産するだけでなくWWOOF JAPAN¹への登録や知的障害者の受け入れ活動といった社会貢献を実践しており、スタッフはおおきなやり甲斐を感じて仕事に励んでいるように見受けられた。我々が訪問した事務所兼住宅は過去に社員寮として使われていた施設であり、研修員やWWOOFの宿泊施設としては最適であり、様々な交流会の会場としても活用できる。約3haの耕作放棄地を農家から借りて栽培を行っているが、谷筋の排水不良地ということもあって栽培技術面ではまだ工夫の余地が残されているように観察された。

さらに、地域農業再生を目指して実践的な活動に力を注いでいる岡山大学農学部附属農場の岸田芳朗先生とお話する機会も得た。附属農場ではアヒルを使った改良版合鴨農法やアゾラ（窒素固定能力の高い水生植物）の利用に関する試験圃場を見学させて頂いた。こうした栽培技術の改善に係る活動に加えて、生産者と消費者を結合させる流通システムの開発にも取り組んでいる。県内の篤農家や県外の有機農業先進地域との間に太いパイプを持ち、牛窓の有機農業者とも密接に交流して地産地消の運動を盛り上げている。

このように牛窓には食の安心・安全を真剣に考える有機農業者が就農しており、自然食がらみの活動を連合体として実践する組織もあり、且つそうした活動を強力にバックアップしていこうとする研究者もいる。中国からの輸入食品の問題をきっかけに食の安心への関心が高まり、また、通常の農業生産への投入コストが高まる中で有機農業が見直される傾向にある。こうした動きの中で、食文化、フードマイレージ、農地保全等をキーワードとした新たな生産・支援システムの構築に向けて牛窓にはいい風が吹いているように感じた。



飯山農園



懇親会



ワッカファーム事務所

¹ WWOOF JAPAN : Willing Workers On Organic Farms (<http://www.woofjapan.com>)